

プレス空知 2019年5月

今年の5月は、令和元年ということで、再度お正月が来たような、新しい気持ちになりますね。10連休ということで、日本人としては、お盆とお正月のような長い休日に戸惑いもあるようですが、私は大学がお休みで、授業がないため、思いがけず自分の練習と研究を落ち着いてできる時間をもらえています。

今日は、ピアニストの練習について、お話ししましょう。私たちのように、幼少からピアノを学び始め、日課として毎日何時間も練習してきたピアニストは、練習することが人生の一部になっています。音楽にはいろいろなジャンルがありますが、ピアノが最も練習時間が多いことで知られています。大学教員になる前は、練習が仕事で毎日欠かさずに練習をしていました。また、留学中の30歳くらいまでは、6時間～7時間練習するのが普通でした。声楽や管楽器などは息を使い、自分の体が楽器という特徴から、長時間は練習することができないようです。ピアノは、まっすぐに姿勢よく椅子に座るという演奏スタイルですので、長時間の練習が可能です。また、ピアノの楽譜は、音符が非常に多く、両手の10本の指によって、オーケストラの総譜すべての音を演奏できますから、非常にたくさんの音をいっぺんに弾くという特徴があります。また、作曲家たちがピアノのオリジナルの曲を膨大に作曲してくれましたので、一生かかってもすべての曲を演奏することができません。とにかく、1曲でも多くの楽譜を読みたいと思うと、時間を忘れて練習することになります。

さて、練習とは、大変複雑なプロセスを踏む行為です。初めて見る楽譜を読み、指を通して音楽として奏でられるようになるには、時間がかかります。私たちピアニストは、多くの場合、初見（楽譜を見てすぐに弾ける能力）が速いことが多く、すべて一から譜を読むわけではありません。楽譜は、瞬間的に絵のように見ているように思います。たとえば、ドレミファソとある場合、ドからソまでの一本の線のように見えますし、ドミソという和音は、1つ飛びのお団子（笑）のように捉えています。また、暗譜をする時も、ピアニストには、いろいろなタイプがあり、写真を撮ったように脳の中で楽譜が見えているタイプや音を聴いて耳コピーで覚えるタイプ、音楽理論とともに分析的に覚えるタイプなどさまざまです。

結局、幼少から高齢までピアノを毎日弾き続けていますと、ピアノと楽譜と目と指と脳が一体化して、楽譜を読めるようになります。プロの演奏家の練習法とそこから生まれる、音楽的なよい演奏法は、初心者にも応用できます。私は、自分の長年培った練習法を学生に積極的に伝えています。繰り返しだけの練習より、頭を使った合理的な練習が、よい演奏に到達する近道となるのです。若いころは、技術的な訓練も必要ですが、音楽は、技術のみではありません。技術的な困難を乗り越えたところで、初めて本当の芸術としての音楽に到達できます。あきらめないうで、練習を繰り返し、ある日、困難を克服した時、達成感とともに、よい演奏につながっていくのです。このプロセスを毎日繰り返すことができる集中力と勤勉さがあることもプロの演奏家になれる資質ともいえると思います。

平成が終わり、令和になっても、やはり、同じように毎日ピアノに向かい、楽譜から作曲家の意図をくみ取り、演奏を続けて行くと思います。